

焰ひの國救くひの水脈

原作：ウイグル民謡 オウステン ナフシスイ Östeng Naxhisi

成田凜

ئۈستەڭنىڭ تېڭى قاتتىق ،	オウスタンムン	テエギカトゥウク
چاچسا كىمەن ئۆتەيدۇ	チエプサ	カトゥトユメン
زاسم تۇڭچىسى بەگلەر ،	ザーラム	トンチイン
بېشەزدىن كەتەيدۇ	ベグレエツ	
	ビシムドユン	キャットウメイドウ

オウステン ナフシスイ これが「Östeng Naxhisi (川のうた)」という民謡ですとサリナさんが教えてくれる。今回は二人でイリイ地方に伝わる民謡を翻訳することに決まった。

この本はたまたまわたしが手元に持っていた本なのだ、こうして日本に持ってきておいてよかった、なんという偶然だ、とサリナさんが話す。イリイ地方、ウイグル語ではグルジャという。グルジャといえはいくつにも枝分かれする川と温和湿润な気候なのだそうだ。その川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む

一八〇〇年頃 グルジャ

命を助ける水がある。人も馬も牛も羊もヤギも、生きとし生ける物たちは水が必要とする。例えば雪解け水はその一つである。世界で最も海から遠い國、砂漠の國、山の國、ここウイグルでは春の雪解け水は生き物の生活を支える天物であった。だが春が幾千回と巡り、人は大陸を駆け回り、大河を越え、砂漠を越え、山脈を越え、山を降り、平野に家を建て、あまねく地にその数を増やして暮らし住むようになった後では、雪解け水だけではすべてを潤すことは叶わなくなった。そしてまた、不断の雪を頂く天山山脈の地下にも命を助ける水が流れていた。これまで人は地下深くに流れる天の水脈へと

は易く至ること能わず、その脈脈はあるがままに置かれていた。だが、今は畑という畑の水が涸れ、華の人々も涸れ、飢餓にうめき苦しむ子どもらひどく不憫なことよ。そこで命じられたが、その地に暮らした農民、庶民に川を作れと、河を耕し地下より水を引いてきて、人を潤せ、我が身を潤せ、命じられ、駆り出されるは男とこ！ 父さん、兄君、弟君は白い衣に白いポタ、天脈水源この地に引いて、石より成る地を鍬で耕す。ガツリガツリと掘れども土はどこまでも深く石だらけ、わたしあ女んなで何も何でも掘ったりしないが、暑い日照りにぐらねる子どもの哀れなことよ。女んな家人は取り残されて、西も東もわきまえ知らぬの河は二十七を作るとて、河は掘っても石の皮、日照りの下では人は皮裂け、父の皮裂け、ああ劳しい、ああ劳し、劳し、見えない水は命を見捨てる、見えない川を作る父、父を見張るは監視員たち、見えない川を見張る目に、裂かれた皮膚は見えなからう、うめく父も見えなからう、父は灼かれて帰らなかつた、二度とは家に帰らなかつた、取り残された子どもの不憫よ、女んなの哀れよ！ 命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。命を助ける水がある。

だんだだんだん だんだだん

だんだだんだん だんだだん

だんだだんだん だんだだん、かわア 掘ってりや りやゝ

だんだだんだん だんだだん、かわア 掘ってりや りやゝ

だんだだんだん だんだだん、鍬っこ はねて ぶつかって

だんだだんだん だんだだん、石っこ はねて ぶつかって

だんだだんだん だんだだん、水のひとつも出てきやしない

だんだだんだん だんだだん、いくら掘っても石だがね

だんだだんだん だんだだん、スクラップアンドビルドのお命さしあげて

だんだだんだん だんだだん、やつら見てるよ じろりと睨んで

だんだだんだん だんだだん、ふりかえれずのお家には、ひもじい子どもと

妻が待つ

だんだだんだん だんだだん、かわア 掘ってりや りやゝ

だんだだんだん　だんだだん、かわア　掘ってりや　りゃゝ
だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　見られても

だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがねつつて

だんだだんだん　だんだだん、おとつあんの　石頭　石でなぐられて

だんだだんだん　だんだだん、びしゃって　飛んでも　川　にはならんの
よう

だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　じろりと睨んで

だんだだんだん　だんだだん、にどかえれずのお家には、かなしい子どもと

妻が待つ

だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがね

だんだだんだん　だんだだん、

果てがないのサ

キリがないのサ

絶えないリズムに鍬のドラムス

灼熱の涸れ沢に躍る血肉と汗飛沫

歌刻む男とこの手足は陽光に滅びはじめる

どこにもないのサ

果てがないのサ

監視の視線は命の奥まで行き届き

やつらどこか遠い場所から来たくせに

瞬きもせずこちらを見ている

夏がどれだけ暑かったとしても、ウイグル帽子の下には白い布を付けるんですよ。きつとびしょびしょに汗が染みこんだでしょうね。その地域の何十人、何百人と同じ川を掘ったんです。お昼にはきつと奥さんが来て、エッケンチヤイとナンを持ってきて応援しに来てくれたのです。わたしは想像ですけれどもねとサリナさんが立ち上がって空の鍬をふるう。どすつと鈍い音が聞こえる気がする。どすつ　どすつ　どどすつ　どどすつ　どどすつ　サリナさんの目には見えている、わたしの目にも見えている。飛び散る汗、真上に上がる太陽、振り返ると腕組みをして睨みつけてくる監視員、一瞬だけそよぐ風、

乾いた土の匂い、重たい泥の匂い、行ったことのないウイグルの土を踏みしめる。脳裏の景色をサリナさんの言葉に委ねる。サリナさんの心もかつての農夫が遺した言葉に委ねられている。

だんだだだだん だんだだん、おっと思うと石ではないが

だんだだだだん だんだだん、泥がぶしょつと沸いてきて

だんだだだだん だんだだん、泥に嵌まつて

だんだだだだん だんだだん、足はおしゃかだ

だんだだだだん だんだだん、隣のじじいはそのまま沈んだ

だんだだだだん だんだだん、次はお前だ お前だよ

だんだだだだん だんだだん、泥に嵌まつて

だんだだだだん だんだだん、足はおしゃかだ

だんだだだだん だんだだん、隣のじじいはそのまま死んだ

だんだだだだん だんだだん、次はお前だ お前だよ

だんだだだだん だんだだん、日照りに灼かれて

だんだだだだん だんだだん、踏み込めなければ

だんだだだだん だんだだん、後ろを向いて

だんだだだだん だんだだん、見張りがいれば

だんだだだだん だんだだん、おっと思うと心臓は

だんだだだだん だんだだん、泥がみたいにくによりと曲がつて

だんだだだだん だんだだん、泥に嵌まつて

だんだだだだん だんだだん、心はおしゃかだ

鍬で掘って、掘って、石を掘って、泥を掘って、河はいつかはできてはいくのですが、しかしその頃には鍬もまた曲がり、腰もまた曲がり、彼らの生活は代わらず貧しく、犠牲とも言い難いようならみとつらみが、一節一節に宿るような、河のうた、オウステン ナフシスイ、命を助ける水があるなら、命を助けた命があった。

オウステン ナフシスイ、河づくりのうた

オウステン ナフシスイ、男とこはみんな

オウステン ナフシスイ、故郷を離れた

オウステン ナフシスイ、オウステン ナフシスイ

「サリナさん、このひとたちはこの歌をうたって自分自身を鼓舞し、やり場のないうらみを込めて昇華したのですが、こんな歌をうたったら、監視員たちにも聞かれてバレてさぞや怒られたのではないでしょうか。」

オウステン ナフシスイ、だんだだんだん だんだだん

体さえ動かすのなら、きっと言葉がなんであろうと、何語を話そうと、聞き取れなくても、

体さえ動かすのなら、おそらく罰せられはしなかった、何語だろうと、聞き取れないから。

オウスタンムン テエギカツトウク、チエプサ カツトユメン ウトウメイドウ

歌に残った言葉こそ、現代^{いま}まで流れる血脈の涸れ沢が如く^よ読みがえり

ザーラム トンチイン ベグレエツ、ビシムドゥン キャツトウメイドウ

かえりたまえ、今日こそ國へ

オウステン ナフシスイ、その川は、教科書に載るような有名な歌ですが、わたしたちの血肉に流れる水は、命が助けた水ですが、いまは涸れ沢だとしても、掘り返せばその石やその水が何でできているのかがわかってしまうのを恐れて、その川は再び灼熱の地の底へ、焼かれて、埋められて、戻されて、消されて、しまったのです。しかし現代も、グルジャの大地は見渡せばあたり豊かに枝分かれた川に潤されているのであって、だから、いま、わたしたちは歌をうたって、その川からすくいなおすんです、そうですね。

んゝアゝんゝアゝ

だんだだんだん、だんだだん

だんだだんだん、だんだだん

その川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む。

んア わたしや グルジャダリヤの雪の水
さりつあなの
んア あなた 月の光のまばゆくて
見やれば なあがい黒川の
なかごろ浮かぶ銀の月
もってかえりやこどもらの
今宵の飯にもなるかとして
双手にすくう雪の水
よいよ よいよと こぼすなアよと
白器に注ぐ月の水
覗けば白色 茶碗底
それじゃお月はどうしたと
手のひら覗けば月もンよう
三日月浮かべるダリヤもンよう
三日月浮かべるダリヤもンよう

ئۆستەڭنىڭ تېڭى قاتتىق ،

چاپسا كىتەن ئۆتەيدۇ .

زالىم تۇڭچىسى بەگلىر ،

بېشىمىزدىن كەتەيدۇ .

ヲオシヨル メンテイイメン

原作：Hoshur Mämtimin 『Ili xelig naxshilirining tarixiy bayani（イリイ地域の民
話・民謡の潮流）』 Milletler neshiriyati（民族出版社）より「Östeng Naxshisi」
オウステン ナフシスイ